十勝バス
路線バス停留所 にぎわい拠点に
近くの建物活用、試験運用

【帯広】十勝バス（帯広）は12日、路線バスの停留所を地域の拠点として活用する取り組みを試験的に始めた。近くの建物で地場産品の販売や宅配荷物の預かり、医師による遠隔の健康相談などを行う。人の流れを生み出し、バス利用増につなげる狙い。国土交通省によると、同様の試みは全国でも聞いたことがないという。

活用している建物は、帯広市大空町5のバス停近くの焼き肉店の1店舗。「にぎわいターミナル」と名付け、営業時間外に宅配やタクシーの事業者、医療機関などの22企業・団体が、野菜販売など九つのサービスを来年2月まで行う。総事業費は1200万円で、国から800万円の助成を受けた。

試験では買い物や飲食の場を設けて新たな収益源にし、広告を掲示して運営費を賄う案も検証。来年度以降、各路線の沿線で整備を進める計画で、将来的には備蓄食料や発電機などを備え、防災の役割も担わせる。

地方のバス路線の多くは便数が少なく、バス停周囲に店舗も乏しい。待ち時間が利用者の苦にならないよう、バス停に付加価値を持たせることにした。

十勝バスの野村文吾社長は「さまざまな事業者と連携し、交通だけでなく、地域の課題を解決する場にしたい」と話した。

（田口友博）

地場野菜の販売や宅配荷物の預かりサービスの説明をする十勝バスの野村社長（加藤哲朗撮影）

電子版に動画

（C）北海道新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。